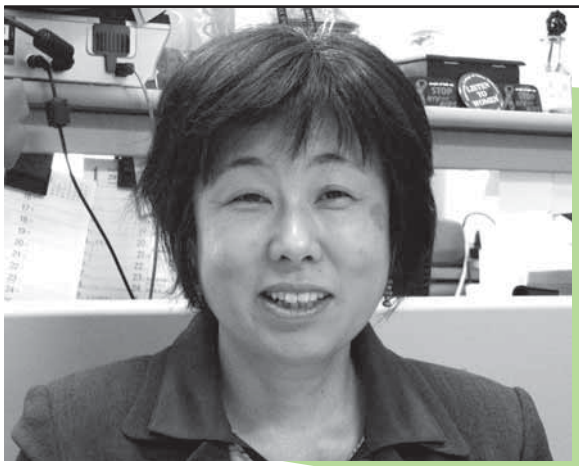

女性研究者ロールモデル 11

医学部
教　授　**前田ひとみ**さん（基礎看護学）
Maeda Hitomi

●プロフィール

1981年　熊本大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程卒業
　　同課程教務員、5月より同大医学部附属病院にて看護師研修。
1984年　同大学院医学研究科研究生
1993年　アメリカ国立癌研究所研究員
1996年　熊本大学医療技術短期大学部に採用
2001年　宮崎大学医学部看護学科
2007年　熊本大学医学部保健学科教授

自分のプラス面に目を向けて！

納得のいく看護を

高校生の時に「数学の教師は女性だとなかなか就職が難しいよ」と数学教師から聞きます。当時、身体も弱くて病院にも通っており、主治医から「自分の身体の健康管理のためにも、医療系の勉強をしたらどう？」というアドバイスを受けました。熊本大学の教育学部で看護の勉強ができることがわかり、受験。数学ではなくても、やはり教育職につきたいという希望があったのです。

大学3年生の病院実習での事、前田さんは暑いので、患者さんをお風呂に入れたいと思い看護師に聞くと「主治医に聞いて」と言われ、主治医に尋ねると「それは看護師が決める事じゃないの」と言われました。そういったいくつかの経験から「看護において何をどうしたいか、自分で納得のいく根拠を持ちたい」と、強く思うようになります。

1984年からは働きながら医学研究科研究生として発生学を学び、「喫煙の胎児への影響」について実験研究を行い、その結果をもとに調査研究し、新しい知見を得ることができました。

米国立研究所の研究員に

93年、夫の米留学が決まり、前田さんは退職します。ずっと忙しく突っ走ってきたので、ゆっくり子どもと向き合うこともできなかったことから、「米国では主婦業に精を出し、子どもと精一杯つき合っていこう」と、専業主婦を目指したものの「最初は良かったんですけど、やっぱり向いていないことがわかって」、数ヶ月後には米国国立癌研究所の研究員になります。エイズ研究の研究室でしたが、基礎の研究者と臨床の研究者が一緒にいるため、情報交換が活発に行われ、HIV感染患者たちがどのようなことで困っているのかがよく見え、看護の在り方を学ぶうえでとても勉強になったといいます。

地域ネットワークづくりを

感染症看護分野では、治療が困難なMRSAのような薬剤耐性菌感染を拡大させないための支援として、現在、情報提供のためのHPを立ち上げる準備中で、地域ネットワーク作りに力を注いでいます。

また、心身のストレスによって、看護師を続けていく気力のなくなった人たちが本来ある力を取り戻すような、医療者のためのエンパワメント・プログラムにも関わり、「看護の専門的機能と役割」の研究に続き、様々な分野で活動されています。

宮崎大学から、思春期の子どもを対象としたHIVなどの性感染症予防教育を続けてきました。これはピア（＝仲間）カウンセリングといい、共通部分の多い同年代の若者が一緒に話し合い支援しあうことで問題を解決するサポート手法。ピアカウンセラー養成の訓練を受けた大学生が、高校生と共に人工妊娠中絶、性感染症等の性に関する問題を話し合うというものです。

宮崎へは、当時小学生だった末のお子さんだけを連れて赴任。当時、高1と中1だったお子さんは寮のある私立中高に入り、家族全員の協力体制で乗り切りました。「より深い親子関係を築くために、親の仕事ぶりを子どもに見せる機会が必要でしょうね」。

モデルを使用した採血の演習風景